

実践報告

小学校中学年における学級目標を基盤とした R-PDCA サイクルによる学級づくりの事例 —生徒指導の視点から捉えた学級経営—

藤原 寿幸

I 問題と目的

生徒指導提要（文部科学省，2010）によると，生徒指導とは「一人一人の児童生徒の人格を尊重し，個性の伸長を図りながら，社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」と定義されている。また，生徒指導は学校の全教職員によって進められるべきものであるが，実際の指導に当たって，生徒指導部とともに学級担任・ホームルーム担任の果たすべき役割が大きいことが指摘されている。

学級担任・ホームルーム担任が担う学級経営と生徒指導の関係の深さについては多くの指摘がされている。文部科学省（2010）は「学級経営・ホームルーム経営は，生徒指導の推進力の役割を果たすだけでなく，生徒指導が学級経営・ホームルーム経営の重要な内容を構成している」とし，八並・國分（2008）は「学級担任は学級をとらして児童生徒の個別化と社会化を促す教育指導をすることになる。すなわちこれが学級経営である。このように考えると，学級経営は学校経営における生徒指導の中核を占め，両者は不即不離の関係にあるといえる」と指摘し，また，河村（2011）は生徒指導において強調されることの1つとして「日々の学級経営の充実と，教師と子ども，子ども相互の信頼関係および好ましい人間関係を育成する中での対応が求められている」ということを挙げており，これらの指摘からも，生徒指導と学級経営の関係はとても密接であることが示唆されている。

小学校学習指導要領第1章総則（2017）には「学習や生活の基盤として，教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため，日頃から学級経営の充実を図ること」と示されている。また，新学習指導要領の総則では，全ての学校段階で「学級経営の充実」という記載が見られるようになり，今後の教育において学級経営を充実させていくことの重要性がより一層強調されたといえることができる。

しかし，大学の教員養成課程で学ぶ教職科目の中には，生徒指導の基盤となる「学級経営」や「学級づくり」といった科目はない。生徒指導だけではなく，全ての教育活動の基盤といっても過言ではない学級経営の多様な手法を学ばず，教員は教壇に立ち，学級経営を行っているという現実がある。

田中（2013）は「教師が自分の経験や先輩の話から学級の方針やルールを決め、それに基づいて叱ったりほめたりする指導を場面に応じて臨機応変に繰り返すという従来に多かった方法では、学級経営の今日的な課題を解決するのは難しくなっており、学級経営には新しい考え方と手法が求められている。」と指摘している。

今日的な課題に向けて、いくつかの学級経営の手法が先行研究により報告されている。ポジティブなコミュニケーションに焦点を当てた活動の一つに、クラス会議がある。「コンプリメント（感謝の言葉を述べる）」「議題の提案」「解決策を出し合う」「解決法を決定する」「次回の議長・書記を決定する」「ニート・シートの順番を決める（neat：素晴らしい、すごい）」「振り返り・改善点を話し合う」という手順で行われ、日本でも実践発表がされており（森重，2008；伊澤，2016など）、一次予防としての効果をもつプログラムとしての有効性や自己効力感や学級集団効力感への効果などが確認されている。PBIS（Positive Behavior Interventions and Supports：ポジティブ行動介入及び支援）は、適切な行動を価値づけ支援する予防的なアプローチである。行動分析学の教育実践研究に基づいた考えで、学校の環境を整備して、児童の望ましい行動を増やし、望ましくない行動を減らすアプローチでもあり、1997年以来、アメリカにおけるポジティブな生徒指導の方途として、多くの学校で実践が行われている。国内でも実践が報告されており（関戸・田中，2010；古市・西山，2015など）、学級全体の好ましい目標行動が増加する効果や、クラスワイドな支援を基盤としたうえで個別支援を導入するという支援の方向性などが示されている。また、「学級力向上プロジェクト」という手法についても事例が報告されている（田中，2013；蛭谷・田中，2015；藤原，2017a；藤原，2018aなど）。学級力向上プロジェクトとは、子どもが学級づくりの主人公となり、学級力アンケートによる学級力の自己評価、学級力レーダーチャートを基にして話し合うスマイルタイム、そして学級力向上のために児童らが主体的に取り組むスマイル・アクションという3つの活動を、1年間（1学期間）のR-PDCAサイクルに沿って意図的・計画的に実践する共同的問題解決学習である（田中，2013）。

以下に、この「学級力向上プロジェクト」の手法を参考にした、小学校3年生における学級経営の実践事例を報告する。生徒指導提要（文部科学省，2010）には、生徒指導の実際の場面としては、集団的な場面が少なくないため、集団を理解しなければならないが、この場合集団を理解するためにも、集団を構成している児童生徒個人を理解する必要があるが、さらに集団の構造や性格そのものを理解することの重要性が示されている。そして、「集団には、それを構成する個人の理解だけではとらえきれない集団特有の問題がある」としており、学級を集団として理解する必要性を述べている。本事例では、学級全員で作った学級目標を基盤として、その達成度を「見える化」することにより、集団理解の手立てとし、学級目標に対する学級づくりのR-PDCAサイクルを展開し、生徒指導の根幹とも言える学級経営の一つの事例として、アクションカード（藤原，2017a）を活用しながら、児童の主体性・自律性を促す学級づくりにより、児童の学校生活への意欲を高めることを目的とする。

Ⅱ 方法

(1) 「学級力向上プロジェクト」

① 学級力アンケート

R-PDCA サイクルをベースとして、意図的・計画的・共同的に学級力向上プロジェクトを推進していくためには、まず、「R」で具体的な分析が必要になる。学級力アンケートは、学級力の状況を診断するための、子ども向けのアンケートである。「公開性」を特徴とし、教師と児童・生徒が一体となって協力しながら、自分たちの学級をよりよくしようと取り組むための情報を示してくれる、開かれた児童・生徒主体のアンケート・システムである。

② 学級力レーダーチャート

学級力レーダーチャートは、学級力アンケートの集計結果を領域別・項目別に視覚的に表現したレーダー型グラフである。児童らはアセスメントの主人公となって、その形状や領域別達成状況を指標として、自らの学級の仲間づくりの成果と課題について友だちと協力して診断したり、改善策を生み出したりするために、学級力レーダーチャートを活用する。拡大掲示し、自分たちの学級力の診断や改善のあり方について話し合うこともできる。

③ スマイルタイム

スマイルタイムとは、学級力アンケートの結果をレーダーチャートで図示し、それを見ながら教師と児童が共に「わが学級」の仲間づくりの成果と課題を話し合い、さらにこれからの学級力向上の取り組みのアイディアを出し合う、「子ども会議」であり、学級力向上の取り組みの成果を児童らに実感させることができる。また、それがさらなる取り組みの立案と実践につながる。（田中、2013）

④ スマイル・アクション

児童らが学級力向上のために取り組む活動。

本実践ではこの学級力向上プロジェクトを参考にしながら、「学級力向上」を「学級目標達成」に

図1 「実際に活用したアンケート用紙」

意味を置き換えて実践を行った。また、アンケート用紙については児童が自ら作成した学級目標に合わせ、田中が作成したアンケート項目を1部変更した。

(2) 対象

公立小学校 3年A組 児童数29名（転出入でメンバーは若干入れ替わった）

担任：30代男性

3年A組：3年生への進級時にクラス編成替えがあり、掃除の仕方はどうなるのか、給食の準備の仕方がこれまでと違う、授業の規律については前年度の学級の影響が大きく、話の聞き方にばらつきがあるなど、児童からは学年と学級が変わったことに対する不慣れな様子が観察された。また、人間関係においても初めての学級編成替えということで不安な様子や緊張した表情を見せる児童も少数ではあるが観察された。ただ、学習や生活への意欲や休み時間に全員で遊ぼうという提案を全体が肯定的に受け入れ、楽しく遊んでいる様子などから、全体的には新しい学年・学級に対する不安よりも、新しさに対する希望の方が強く感じられた。

(3) 質問紙

「学級力アンケート 小学校中学年用」（学級の実態に合わせ、項目を1部変更）「学校生活意欲尺度」（河村，1999）

「学校生活意欲尺度」は標準化された心理尺度である。友達関係得点、学習意欲得点、学級の雰囲気得点の三つの尺度得点により、児童の学校生活のそれぞれの領域における意欲を測定するものである。この「学校生活意欲尺度」を6月（Time 1）と3月（Time 2）に実施し、対応のある t 検定を行った。学校長に承諾を得た上で、調査を実施するにあたり、この調査は成績に関係がないこと、回答は強制ではなく回答しなくても不利益を被らないこと、個人のプライバシーは守られることが調査参加者に伝えられた。

(4) 手続き

当該学級において、学級力向上プロジェクトを参考にして学級目標を基盤としたR-PDCAサイクルによる学級づくりを1年間行った。1学期は学級目標づくりとそれを意識した学校生活に重点を置いた。学級目標作成の際は「『活きる学級目標』づくりに必要なスリーステップ」（藤原，2017b）を参考にした。2学期になってから、学級力向上プロジェクトのR-PDCAサイクルを開始し、2学期と3学期の計2回、展開した。また、R-PDCAサイクルにおける様々な活動については、スマイルタイム等の話し合いについては学級活動の時間に行ったが、その他の活動については学級活動、各領域、各教科の時間や給食、掃除、休み時間、朝の会、帰りの会、家庭学習など様々な機会を捉えて実施した。

先行研究では、学級の改善に必要な活動の作戦会議において、いきなり児童らに効果的な活動の提案を期待するのは難しいことが指摘されている（田中，2014；藤原，2016）。したがって本実践では、

P（計画）の段階で、アクションカードを活用した。アクションカードとは、様々な学級状態において効果が発揮されると思われる活動が、文字とイラストによってカード化されたものである。

本実践を対象化するために、本実践を評価していく方法として、R-PDCA サイクルの中で実施される学級目標の達成度を測るアンケートやレーダーチャートの他に、担任教師の感想や児童の発言や記録、さらに客観的な指標として児童の学校生活への意欲を測定する、標準化された心理尺度である「学校生活意欲尺度」（河村，1999）を活用していく。

Ⅲ 結果

本実践を児童に親しみやすい呼称にするため、学級力向上プロジェクトではなく、自分たちで決めた学級のニックネームを入れて「〇〇クラス パワーアッププロジェクト」と題して、展開することとした。

経過の概要

1 1学期の取り組み

学級づくりの R-PDCA サイクルを展開するため、まずはその基盤となる学級目標づくりを行った。どのような学級でも、けんか、人間関係のトラブル、失敗など1年間いろいろなことが起きることが予想されるが、学級目標をつくるにあたり、どのようなことがあってもそれらを乗り越えて、成長に変えていけるような、学級全員にとって心の拠り所となる「活きる学級目標」になるようにしたいと考えた。そのためには、教師が一方的に示すような学級目標では、児童の主体性・自律性が発揮しづらいので、児童が「自分を含めた学級全員で決めた」と思えるような方法を検討した結果、「『活きる学級目標』づくりに必要なスリーステップ」（藤原，2017b）を参考にし、学級目標を決めることとした。

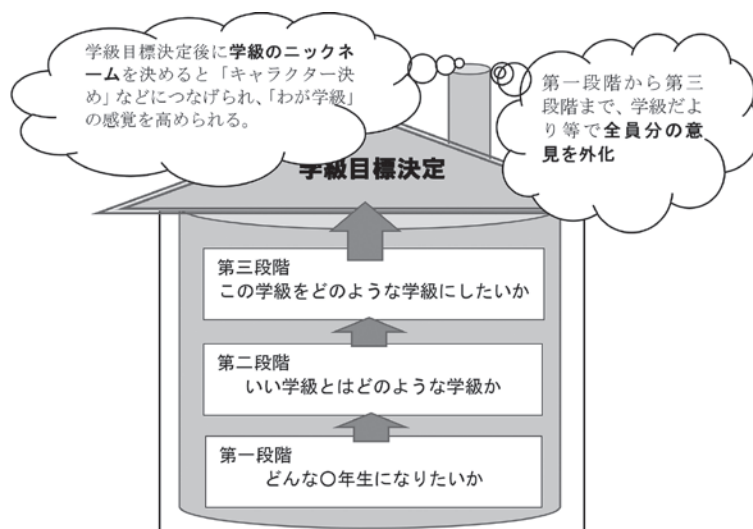


図2 「『活きる学級目標』づくりに必要なスリーステップ」

4月の月上旬、まずは第一段階として「どのような3年生になりたいか」について全員に考えを書いてもらい、全員分の考えを学級だよりに掲載し、全員がその学級だよりに手にしながら、全員の発表を聞く場面を設けた。それが終わったら、第二段階（いい学級とはどのような学級か）、第三段階（この学級をどのような学級にしたいか）についても第一段階と同様の手順で展開し、4月から5月にかけて学級全体で共通理解をしていった。この三段階を経験していく中で、児童は友達の考えに共感を示したり、友達のアイデアに影響を受けたりする様子が観察された。また、段階が増えるたびに学級目標作成への児童の真剣さが増し、「全員でしっかりと考えていきたい」という雰囲気が醸成されたように感じられた。

「『活きる学級目標』づくりに必要なスリーステップ」を経て、学級目標が決まった。「ゆうき」「心を1つに助け合う」「見本になれる」「だれにでもやさしく」「心を1つに助け合う」「みんななかよくえがお」の6つのことを大切にできるクラスにしようということになり、その後、学級目標の作成のときと同様、全児童がアイデアを出し、学級のニックネームが決定した。学級目標が決定した瞬間は、大きな拍手と歓声が上がった。担任は「長い時間をかけて、どんなときも全員で考えて、全員がアイデアを出し、全員の考えを知りながら決めてきました。ここにいる全員がこの学級目標づくりに参加したからこそ、今の様な拍手が上がったのですね。」と、児童のこれまでの前向きで一生懸命な学級目標作成への取り組み姿勢を承認した。また、その喜びの様子を学級通信にまとめ、保護者にも伝えた。

その後、「小学校中学年用学級力アンケート」（田中，2014）を基盤として、本学級で活用していく「〇〇クラス学級目標達成アンケート」の項目と文言を学級児童全員と確認しながら、検討し、完成した。アンケートについては2学期から活用していくことを伝えた。

学級目標が決まったその日から、1学期の終わりまでは、担任は学級目標を常に意識した指導を心がけた。例えば、困っている1・2年生に声をかけている児童がいると、「学級目標の『だれにでもやさしく』を頑張っているね。」と声をかけ、全校朝会のように元気なあいさつができていたり、しっかりとした態度で話が聞けていたりすると「『見本になれる』がよくできていたね。」「休み時間にドッジボールやりたい人、屋上に行こう。」

とみんなに声をかけている児童には「『みんななかよくえがお』につながるいい声かけだったね。」と見留め、認める対応を行った。

そのような認め合いが児童同士にも広がっていくように、担任の方から、アクションカードを提示して「帰りの会で花丸発表」をやってみることを提案した。その内容は、みんなで決めた学級目標の達成に向けて頑張っている人を帰りの会で伝え合うというものである。児童の反応がとてもよかったため、早



図3 担任が児童に提示したアクションカード

速開始し、毎日の帰りの会では、「〇〇くんが、給食のときに、苦手なものを食べようとがんばっていたので、『ゆうき』があるなと思いました。」「今日は暑かったけど、汗をたくさんかきながら、休み時間にクラス全員で増やし鬼をして盛り上がったので、みんなで『みんななかよくえがお』ができたと思います。」など、学級目標に関連したさまざまな花丸が発表された。

2 2学期の取り組み

2学期から、「学級力向上プロジェクト」（田中，2013）の R-PDCA サイクルを参考に、その展開を開始した。8月末に夏休みが終わり、9月は、1回目の学級目標達成アンケートを行った。初めてのアンケートなので、1つ1つ項目を確認しながら実施した。

スマイルタイムではレーダーチャートを公表し、学級

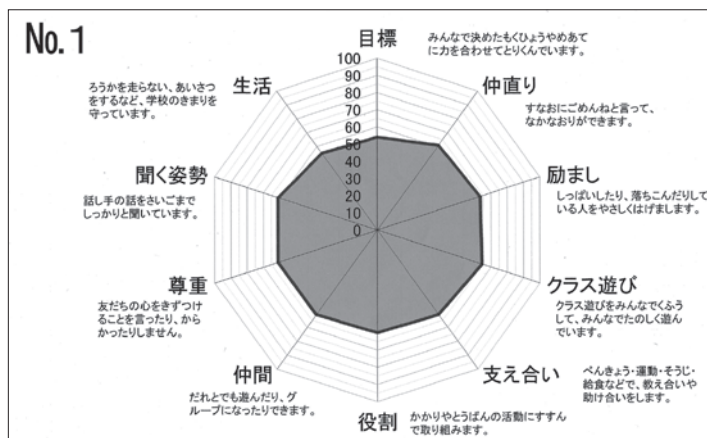


図4 第1回レーダーチャート（9月）

が「がんばっている項目」と「これから努力が必要な項目」、また、その理由について分析を行った。個人で考えた後にグループで交流し、そのあと学級全体で話し合った。分析の手順やグループでの話し合いのスキルについてもこの時間に確認した。レーダーチャートの形がほぼ円に近いような形になっており、特徴が掴みづらいと担任は考えていたが、特に低い項目がないからこそ、児童からはさまざまな角度から改善点が提案された。児童からは、「学級について詳しく話せてよかったと思います。」「同じ項目でも人によって理由がちがって驚いたけど、あっそういうこともあるのかとういう発見がありました」などの感想が聞かれた。

9月下旬、分析を受けて、アクションを考える活動を行った。先行研究では、高学年児童でさえ初めてアクションを考える際は悩んでしまい、なかなかアクションを提案できないことが挙げられている（藤原，2018a）。今回は3年生という発達段階も考慮し、担任がアクションカードを提示した。アクションカードとは、前述の通り、様々な学級状態において効果が発揮されると思われる活動が、文字とイラストによってカード化されたものである。小学校版のアクションカードは現在36種類ほど考案されている（藤原，2018b）。この時提示したアクションカードは「学級マスコットキャラクターを考えよう」、「魂の運動会標語」、「『学級ソング』をつくって歌おう」など6種類である。黒板掲示用（B4判）とグループ配布用（A5判）を用意した。「この中のどのアクションを実施したら、パワーアップできるかな。取り組んでみたいアクションを、グループで話し合って1つ選ぼう。そのとき、『なぜそのアクションがいいのか』しっかり理由を話そうね。」という指示を出した。4～5人の7グ

グループで話し合い、その結果を学級全体で話し合った。そして、グループの代表者が選択したアクションとその理由を発表した。その結果、6つのアクションは全て効果が期待できそうだという結論になり、全てのアクションを行うことになった。児童は、「みんなよく考えていろいろな案が出たから、12月にはレーダーチャートがもっと大きくなっていると思う。」「みんなで協力してもっといいクラスにしたい。」などの感想を書いており、意欲の高まりが感じられた。

その後、2学期を通して、アクションカードを活用して決定した以下のアクションを行った。実施する理由をすでにしっかりと話し合っていたので1つ1つのアクションを実施の際は、児童は意欲的に取り組み、アクションは積極的に展開された。



図5 2学期に実施したアクションカード（筆者作成）

表1 3年A組 パワーアッププロジェクトの1・2学期の主な取り組み内容

学期	主な取り組み内容
一学期	<ul style="list-style-type: none"> ○話し合い「いいクラスってどんなクラス」 ○「学級目標を作ろう」 P「クラス遊びを工夫しよう」開始 P「帰りの会で『花丸発表』」開始 ○「1学期絆を強める会」実施
二学期	<ul style="list-style-type: none"> ○第1回学級力アンケート ○第1回スマイルタイム（診断・課題の明確化） ○第2回スマイルタイム「2学期パワーアップアクションを考えよう」 P「パワーアップはがき新聞」作成 P「カンパニー活動に取り組みよう」 P「グループワークトレーニングをしよう」 P「ひみつの親切」の実施 P「魂の運動会標語」作成・発表 P「学級キャラクターを考えよう」実施 P「魂の音楽会標語」作成・発表 P「『学級ソング』をつかって歌おう」実施 ○第2回学級力アンケート ○第3回スマイルタイム（診断・課題の明確化） ○「2学期絆を強める会」実施 <p style="text-align: right;">P…パワーアップのためのアクション</p>

以下に1・2学期のパワーアッププロジェクトの主な取り組み内容を表にまとめた。

2学期に行ったアクションのいくつかを紹介する。

○3年A組で実施したパワーアップのためのアクション

(ア)「魂の運動会標語」の作成・発表（9月中旬）

運動会に向けてのそれぞれの思いややる気を、標語としてイラストなどを添えて紙に書き、全員が一つのサークルになってそれを発表し合うというものである。スマイルタイム直後のアクションだったので、児童は運動会に向けて特別な目標を掲げるのではなく、運動会も学級目標達成のための行事にしていこうというような雰囲気であった。「みんなで力を合わせて、いいダンスにしよう」「心にくる運動会にしよう」や「学級目標に近づける」「えがお！ みんなの運動会」「ゆうきをもってたちむかう」など、学級目標を強く意識した標語が発表された。一人が発表をし終わると、全員が自然に「オー！」と拳を天井に突き出すというサイクルが自然に起き、とても盛り上がった。運動会当日は、全員の標語を教室前面のホワイトボードに掲示し、運動会当日の朝や、お弁当のために教室に戻ってきた際に、児童が見て意欲が湧くようにした。

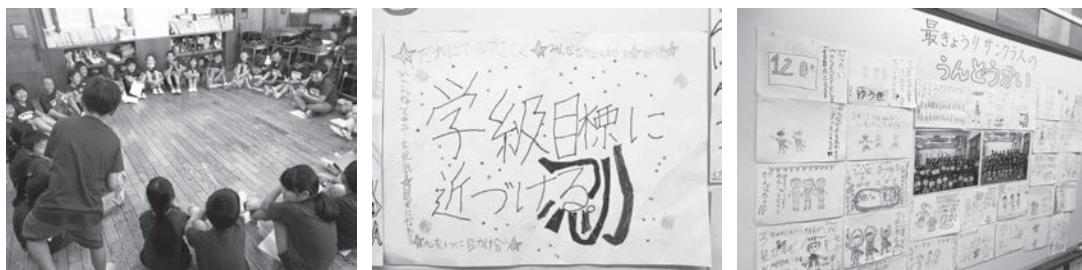


図6 魂の運動会標語

(イ)『学級ソング』をつくって歌おう

「学級ソング実行委員」を立ち上げ、アクションを開始した。曲を作るのは難しいので、すでにある楽曲から借りて、歌詞をみんなで考えていこうということになった。話し合いにより、曲は「勇気100%」（光 GENNJI, 1993）に決まり、学級目標の6つのキーワードがバランスよく歌詞に入るように、分担を決めて全員で歌詞作りを行った。学級ソングが出来上がり、教室で全員で歌った。歌い終わった後、「もう1回、もう1回」のコールが起き、もう一度歌った。その数日後の放課後に、校舎内で偶然出会った保護者の方が「家の子が、毎日のように家の中でクラスの歌を歌っているんです。すごく気に入っているみたいで。いい歌ですね。」と話してくださった。このように児童も大変気に入ったようであった。実行委員を務めた児童の感想には次のような記述がみられた。「私がどうすればいいかオロオロしていたら、〇〇ちゃんが助けてくれた。すごくうれしかった。レーダーチャートの『支え合い』が大切だと分かった。みんなで歌ってみるとなんだか心が温かくなって、学級目標に

3年O組 学級ソング

『最きょう 1000%』

作詞 3年O組のみんな

仲間がいて 笑いあって 最きょうだよ
 だれにでもやさしくして みんな笑おう
 みんなで笑い 楽しんだよ 3年O組で
 つらいときはいつだって 元気でいよう
 最きょうサンクラスは やくそくを守る
 けじめをつけて 見本になろう
 そうさ 100%勇氣
 もうがんばるしかないさ
 3年O組の心 一つにするよ
 そうさ 1000%きずな
 ずっと大切な仲間
 ぼくたちのクラス最きょう
 いつまでも かがやいてるよ

図 7 全員で作った歌詞

近づけたと思ったから、よかった。」

12月に実施した第2回のアンケートでは、学級のパワーアップが確認された。レーダーチャート
 を児童に提示した際には、「すごい」という声や「おー、やったねー」という声が聞かれた。その後、
 パワーアップできた要因をアクションカードと関連付けながら分析したり、課題として
 今後頑張っていきたいことなどを話し合ったりした。その際、児童からは「みんなが手
 を挙げて、意見を出していたのがよかった。」「9月のレーダーチャートと比べて、圧倒
 的に大きくなっていて、そして今日、どうしたらもっとい

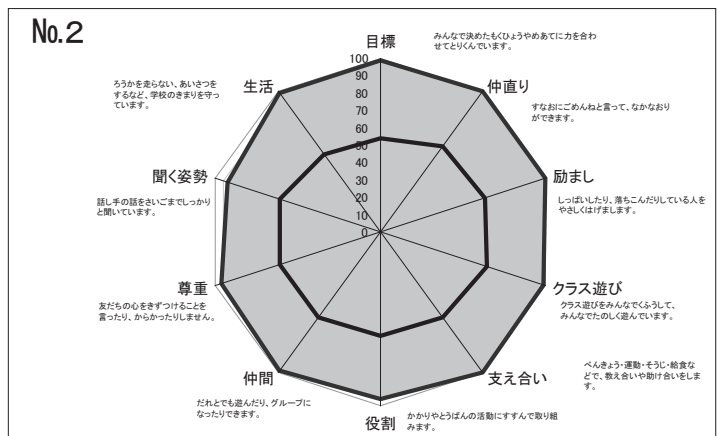


図 8 第 2 回レーダーチャート (12月)

い結果が出せるかをみんなで考えられたので『やっぱりこのクラスは最強だ』と思った。」などの感想が出た。ここで、パワーアッププロジェクトの1回目の R-PDCA サイクルが終了した。

2 3 学期の取り組み

12月のレーダーチャートを受け、3学期にどのようなアクションを行っていくかの話し合いを行った。2学期は、アクションを考える際にアクションカードを「選択」したが、3学期は児童のより主体的な取り組みを促進させるためにアクションカードを「作成」することとした。つまり、児童がオリジナルのアクションカードを考案するという試みである。藤原（2018a）は、高学年において児童がオリジナルのアクションカードを作成する実践を行い、「児童が考えたアクションは、既成のアクションカードを応用したものが多かった。したがって、既成のアクションカード『選択』していくという活動は、オリジナルのアクションカードの「作成」への重要なステップである」と指摘している。ただ、今回においては高学年ではなく、中学年児童ということもあり、オリジナルのアクションカードを考案することが児童にとって負担となりすぎないように、既成のアクションカード（小学校版36枚）を全て児童に見せ、必要に応じて参考にしてよいことにした。それを参考にする児童もいれば、参考にせずどんどん作り上げていく児童もいた。全員が作成できたところで「アクションカード発表会」を行った。

小学校中学年児童でも、効果期待できそうなアクションが考案されることを願いながら、アクションカード作成の指導を行ったが、とても興味深いものが次々と発表された。一人ひとりが順番に前に出て、ICT機器を活用して発表する形にしたが、「どのようなアクションか」「行ったらどのようないいことがあるか」などについてしっかりと発表できていた。また、友達の発表を真剣に聞いたり、「お



図9 児童らが考案し、作成したアクションカード

表2 3年A組 パワーアッププロジェクトの3学期の主な取り組み内容

学期	主な取り組み内容
三学期	<p>○ 第3回学級力アンケート ○ 第4回スマイルタイム (診断・課題の明確化)</p> <p>○ 第5回スマイルタイム 「3学期パワーアップアクションを考えよう」</p> <p>○ 「自分で考えたアクションカード発表会」実施</p> <p>P 「学級キャラクターグッズを作ろう」 P 「授業クイズをしよう」</p> <p>P 「学級目標に向けてがんばっている MVP を決めよう」</p> <p>P 「学級かるたを作って遊ぼう」 P 「幼稚園の子たちと交流しよう」</p> <p>P 「3年生卒業カウントダウンをしよう」</p> <p>P 「『このクラスでよかった』と思っていることを発表しよう」</p> <p>○ 「3学期絆を強める会」実施</p> <p>○ 第4回学級力アンケート ○ 第6回スマイルタイム (診断・課題の明確化)</p> <p style="text-align: right;">P…パワーアップのためのアクション</p>

もしろそう！」とポジティブな雰囲気中で反応したりする様子が観察された。このアクションカード発表会も学級目標達成に向けての1つの立派なアクションになっているように思われた。発表後は、実際に取り組んでみたいアクションを話し合い、その中からいくつかを実際に行った。表2に3学期のパワーアッププロジェクトの、主な取り組み内容を表にまとめた。

○児童らが考案し、実際に実施したパワーアップのためのアクション (3学期)

(ア) 学級キャラクターグッズをつくろう

2学期に実施したアクション「『学級キャラクター』を考えよう」で決まった、学級のマスコットキャラクターをもっと活躍させたい、マスコットキャラクターをもっと身近に感じたいという思いから提案されたオリジナルアクションで、そのグッズをつくろうというもの。担任からの「時間とお金がかかりかからないもの」という条件が付いた。学級会を開いて話し合った結果、葉に決定した。マスコットキャラクターを葉サイズに担任が印刷し、あとは全員が好きな色を塗り、マスコットが掛けているたすきに好きな言葉を書いて、ラミネートをしてリボンを付けた。実行委員を設け、実行委員が材料の準備や作り方の指示などを行った。自分の葉を持って、全員で記念撮影をした。児童は読書用の本や、連絡帳などに活用していた。

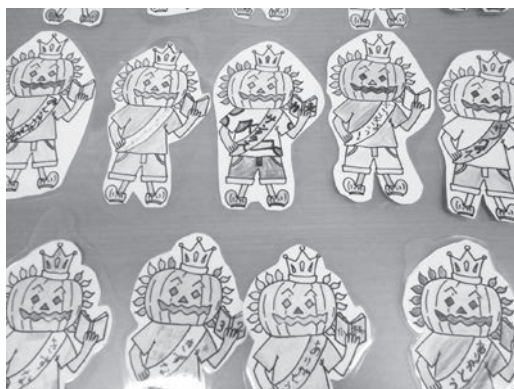


図10 全員で作ったしおり

(イ) 学級かるたをつくって遊ぼう

校庭が長期工事に入り、外でクラス遊びができなくなりました。そんなとき、室内でみんなで遊べないかということで提案されたオリジナルのアクション。学級目標を意識できることもあり、一



図11 学級かるたで遊ぶ様子



図12 全員で作った「学級かるた」

石二鳥ということで開催された。実行委員が中心となり、学級児童全員に学級目標の文言とかるたの50音を振り分け、書き方のポイントなどを伝えた。担任は、印刷とラミネートをしただけで、その他の作業はクラス全員で協力して行い、完成させた。3学期の「絆を強める会」では「学級かるた大会」を行い、大変盛り上がった。

(ウ) 3年生卒業カウントダウンをしよう

3年生の学級目標で過ごすのもあと少しということで、残りの一日一日を大切にしたいという思いから考案されたオリジナルアクション。画用紙に「あと〇日」と学級のみんなへのメッセージを書き、当日になったら朝の会で学級のみんなの前で発表するという活動になった。メッセージには「もうすぐ1年たつけど、1日1日を大切にしよう」「特別すごいことをしようと思わせるのではなく、当り前のことを当り前にしましょう。」「学級目標を達成できるように今日もがんばろう」などがあり、それを聞く児童も「オー！」と歓声を上げたり、うなずいて聞いたり、拍手をしたり、色々な反応が観察された。この発表の時間を楽しみにしている児童がたくさんいた。



図13 カウントダウンカレンダー

(エ) 「このクラスでよかった」と思っていることを発表しよう

1年間の最後に、笑顔で終われるよう、みんなで「この学級でよかった」ということをテーマを決めて、書き表し、全員でサークルになって発表し合う活動である。「学級開き」ならぬ「学級閉じ」にぴったりな活動だと担任も感じた。「みんなで決めた学級のキャラクター」「みんなで作った学級ソング」「みんなで話し合ったパワーアッププロジェクト」「大成功！ ようちえん交流」「えがおにな



図14 発表会前に全員がかいた原稿

れた！」など、様々なテーマで児童は一人ひとり発表を行った。「私の一番の思い出は、みんなで学級目標を決めたことです。」「ぼくはみんないっしょにクラス遊びをしたことがすごく楽しかったです。」「みんなのえ顔を見ると私のゆうきがわかります。みんなは学級目標たっせいするためにがんばっていて、わたしもがんばろうと思えました。」盛り上がる場所は盛り上がったのだが、しみりとした雰囲気になることもあった。全員の発表のあとは、やりきった感じ、達成感みたいなものが感じられた。発表用原稿は、学級の文集に全員文掲載した。

3月下旬に行った、第3回のアンケート結果では、アンケートを開始した9月に比べるとレーダーチャートの大きさがかなり大きくなり、また、10項目中8項目において値が100になる等、多くの児童が学級目標に対して「達成できている」と実感できていることが推察された。

また、6月 (Time 1) と3月 (Time 2) に実施した「学校生活意欲尺度」(河村, 1999) の結果は、3月 (Time 2) において平均値が全ての項目において上昇し、対応のあるt検定の結果、友達関係と学級の雰囲気については有意に高まっていることが分かった。

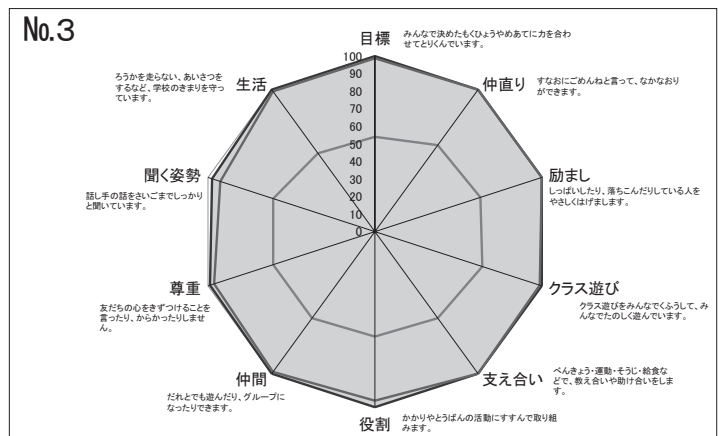


図15 3回目のレーダーチャート (3月)

表3 学校生活意欲尺度の比較

	Time 1 (n=27)	Time 2 (n=27)	t 値
友 達 関 係	10.85 (1.68)	11.67 (.78)	2.94**
学 習 意 欲	10.37 (1.42)	10.70 (1.35)	1.25
学級の雰囲気	11.48 (.98)	12.00 (.00)	2.76*

() 内は標準偏差 * $p < .05$, ** $p < .01$

IV 考察

(1) 学級目標を基盤とした R-PDCA サイクルによる学級づくり

1学期に「学級目標作成のためのスリーステップ」を採用し、全員で学級目標を決め、それを基盤とした R-PDCA サイクルによる学級づくりを2学期から開始した。これまで述べてきた通り、児童は常に学級目標を意識しながら、学習、生活、行事等に取り組むようになった。これは、学級目標を決める過程で全員が当事者意識をもって、学級目標決定に参画し、全員が真剣な態度で学級目標づくりに向き合うことができたことによると考える。そして、児童にとって、ただの学級目標ではなく1年間大切にできる「活きる学級目標」になることにより、学校・学級生活のあらゆる場面で、学級目標を意識することができたということが推察される。

第3回のアンケート結果では、9月に比べるとレーダーチャートの大きさもかなり大きくなり、値が100に達する項目もあった。ただ、12月(2回目)と比べると、実際によくってはいるのだが、レーダーチャートの拡大が分かりづらかった。担任としては2回目よりもさらにがんばったということ全員で共有したかったので、アンケートを集計した値が数値として示されている表(図15)も一緒に提示した。このことにより、「100の項目がたくさんある!」「12月よりもよくなっている!」などの声が聞かれたので、安心した。アンケート結果を可視化する際は、一般にレーダーチャートの方が分かりやすいと考える

	回	第1回	第2回	第3回
ゆうき チャレンジ	目標	54	99	100
	仲直り	61	100	100
どんなときでも 元気	励まし	63	100	100
	クラス遊び	64	99	100
心を1つに 助け合う	支え合い	61	100	100
	役割	60	96	100
みんななかよく えがお だれにでも やさしく	仲間	61	99	100
	尊重	61	96	99
見本になれる	聞く姿勢	61	93	98
	生活	55	99	100

図16 アンケート結果を示す表

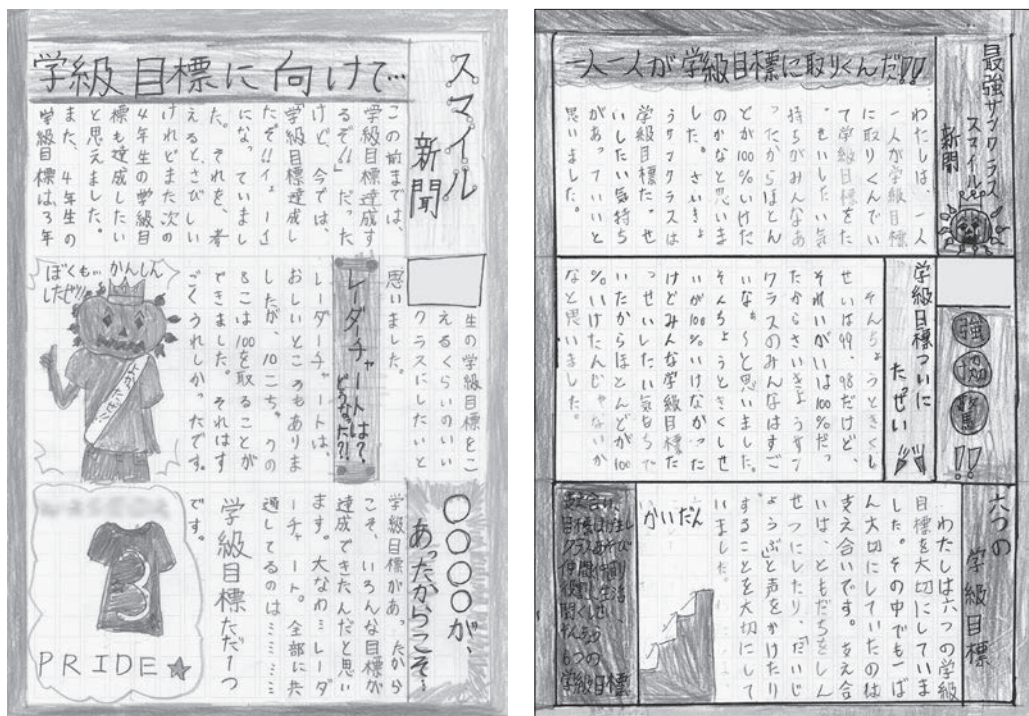


図17 3月末に児童がかいた「はがき新聞」

が、今回の場合のようにレーダーチャートで一目分かりづらいつきに、数値の表を示す方法も有効であることが分かった。

最後のスマイルタイムにおける児童の感想からは「パワーアッププロジェクトでは、みんなが役割をもって一人ひとりが責任をもってがんばっていたから『役割』が100になった」「毎日クラスみんなまで遊んでいるから『クラス遊び』がよかった」「どんな時でもだれかが失敗したとき、『ドンマイ』と言っているから『励まし』が高い」など、一つひとつの項目について分析したり、学級の成長を喜んだりする意見もあったが、「3年生最後のスマイルタイム。司会も記録も自分たちでできたり、3学期を振り返られてよかった。」「今日は全員が発表できてすごいと思った。」など最後のスマイルタイムに対する思いも見られた。「『目標』についてたくさんの意見が出たのは、みんなが学級目標を大切にしてきたからだと思う。」という意見もあった。そこで担任は児童に「1年間で学級目標は達成できましたか。できたと思う人?」と聞いた。全員が手を挙げる様子が観察された。3月末に書いたはがき新聞には「学級目標達成!」「長縄の記録も伸びたし、みんなの絆も深まったし、3年生でやり残したことはないと思います。私は、学級目標を達成できてとてもうれしいです。」「私は学級目標を達成できたと思います。理由は、幼稚園交流や、MVPなどのアクションカードで色々なことをがんばり、色々なことが身についたからです。それに当り前のことを当たり前でできるようにもなったからです。4年生でも学級目標を達成したいです。」「学級目標があったからこそ、いろんな目標がたっせいできたんだと思います。」などの記述がみられた。児童のはがき新聞には、学級目標達成に向け

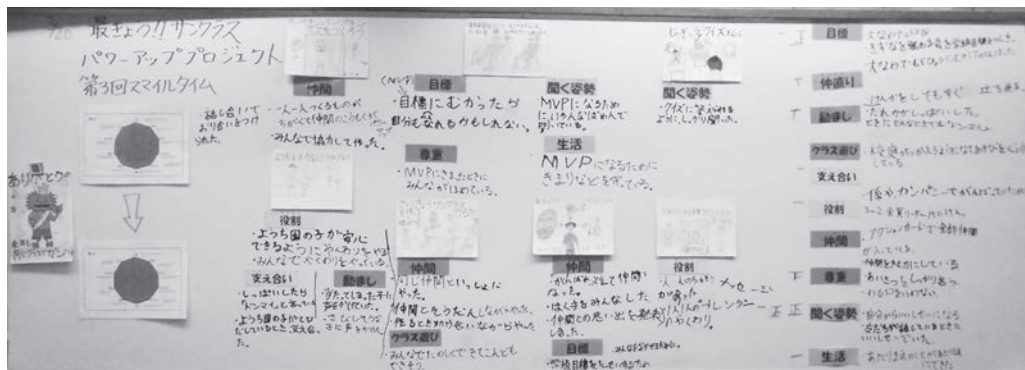


図 18 最後のスマイルタイム後のホワイトボード（3月末）

て学級のみんで一生懸命にがんばり、そして見事達成した喜びや4年生という次の学年への希望や期待が表現されていた。

また、上でも述べた通り、今回は学級力向上プロジェクト（田中，2013）を参考にし、「学級力向上」を「学級目標達成」に意味を置き換えて実践を行った。「『この学級でよかった』と思うことを発表しようの会」用の原稿において、ある児童が書いた文に次のような記述があった。「ぼくはパワーアッププロジェクトが心にのこっています。理由は色いろ話し合い、色んな意見を出したり、全員が意見を出したりして学級のことを決められたからです。（中略）パワーアッププロジェクトを通して学級目標たっせいにぐんぐん近づいているのではないかと思ったので思い出にのこっています。なのでパワーアッププロジェクトたっせいは、学級目標たっせいに等しいと思います。」この文の通り、今回の実践は、学級力向上プロジェクトを自分たちの学級の実態や学級目標に合わせて効果的にアレンジして活用できた事例になったと考える。

最後の保護者会用に担任は、学級目標作成・決定から3月までの児童のパワーアッププロジェクトの様子について撮り溜めてきた写真をスライドショーにして用意した。写真と写真の間に、担任は児童に対するこの1年のがんばりを承認し、励ますメッセージを入れた。児童は時には爆笑し、時にはしんみり鑑賞し、終わったときには大きな拍手をして「アンコール！アンコール！」と盛り上がった。保護者に見せた際は、爆笑・しんみりは児童と同様であったが、それ以外に涙も見られた。

(2) 小学校中学年におけるアクションカード活用について

上記の(ウ)で挙げた「3年生卒業カウントダウンをしよう」は既存のアクションカードである「全員で卒業カウントダウンをつくろう」を参考にして作成されている。小学校中学年の児童の発達段階を考えた際、全員が自分でオリジナルのアクションカードを作成するのは困難ではないかということで、今回は既存のアクションカードを参考にしてもよいということにしたが、そうすることにより、オリジナルのアクションカードを作成できるようになった児童もおり、最終的には学級児



図19 既成のアクションカードとそれを参考にして作られた児童のアクションカード

児童全員がアクションカード発表会でオリジナルのアクションカードを発表することができた。低学年児童でもこれが可能かどうか、今後の課題としたい。

(3) 生徒指導の視点で捉えた学級経営

藤原・井芹（2018）は「4月～5月の段階で、担任が児童の行動基準を評価的に指導するのではなく、児童の意見から目標を抽出し、『皆で決めたものである』という共通認識を早いうちから意識づけ、その目標に沿った行動を実行する児童をモデルにするよう全体を方向づけ、習慣化させるような集団全体に対する自律性支援的な関わり方が有効」であり、また、そのことにより児童の学校生活に対する意欲が高まるということを指摘している。これまで述べてきたように、本実践において作られた学級目標は児童にとって「活きる学級目標」となった。担任も児童への指導・援助をする際は学級目標を大切に。「先生はこう思うから、こうしよう。」というより「みんなで決めた学級目標を大切にするには、どうしたらいいかな。」というように、学級目標を基盤とした指導・支援を常に意識した。3学期に児童が書いた文には『自分たちでクラスのことを決めるんだよ！！』とわたしたちをささえてくれた〇〇先生、ありがとうございました。』という学級担任に向けた記述があったことから、学級目標を基盤としたR-PDCAサイクルは、担任教師が児童や学級集団全体に対して自律性支援を行っていく手法にもつながっていたことが推察される。また、自律性支援はその語の通り、児童の自律性・主体性・意欲を高めると考えられる。6月（学級目標が完成し、それを意識して生活し始めたころ）と3月（最後のスマイルタイムを実施したころ）に実施した「学校生活意欲尺度」では、3月において「友達関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」の平均値が全て上昇し、「友達関係」と「学級の雰囲気」については有意差が確認され、学級目標の作成・決定した時期から、それを基にしたR-PDCAサイクルによる学級づくりのまとめの時期の間に、児童の学校生活への意欲が高まったことが確認された。

生徒指導提要（文部科学省，2010）には、生徒指導は「学校生活が全ての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指し」していることがその意義として示されており、生徒指

導について考える際、学校生活全体への意欲の高まりをその大きな目標の1つと捉えることができる。本実践において、全員でつくった学級目標の達成に向けて意識を停滞させず、活性化させながら実施した R-PDCA サイクルの取り組みが、児童の自律性を高めることにつながり、その結果、学級児童の学校生活の意欲を高めることにつながったと考える。

つまり、以上の学級目標を基盤とした R-PDCA サイクルによる学級づくりが児童や学級集団全体の自律性を高め、また、学校生活全体への意欲を高められたという点で、学級経営を充実させることにより、生徒指導の視点からも効果が挙げられたことが推察される。したがって本実践は、生徒指導の基盤となる学級経営の、1つの効果的な実践事例となったのではないかと考える。

【付記】

- 本論文の一部は、第16回日本教育カウンセリング学会研究発表大会にて発表されている。
- 本研究にご協力いただきました小学校の皆様、貴重なご助言を賜りました田中博之先生に感謝申し上げます。また、査読者の先生方には貴重な助言をいただきました。深く感謝いたします。

【参考文献】

- 蛭谷みさ・田中博之 2015 小学校5年生における学級力向上プロジェクトの開発と評価—教科横断的なカリキュラム編成を通して— 早稲田大学大学院教職研究科紀要 第7号 pp.59-88
- 藤原寿幸 2016 アクションカードの活用で学級力アップ！ 田中博之編著『学級力向上プロジェクト3』金子書房 pp.12-21
- 藤原寿幸 2017a 「学級力向上プロジェクト」を活用した学級経営—若手教員へのサポートとアクションカード開発の視点から— 早稲田大学大学院教職研究科紀要 第9号 pp.117-130
- 藤原寿幸 2017b 「活きる学級経営プラン」をたてる—1年を通して完成させる「学級づくりマップ」児童心理 71(5) 金子書房 pp.434-438
- 藤原寿幸 2018a 小学校高学年における学級力向上プロジェクトを活用した学級づくりの事例—特別活動や道徳などにおける取り組みと児童によるアクションカードの作成— 早稲田大学大学院教職研究科紀要 第10号 pp.57-72
- 藤原寿幸 2018b 学級づくりのカリキュラム・マネジメント—アクションカードの活用によるビジュアル・デザイン— 田中博之編著『若手教員の学級が伸びる！学級力向上プロジェクト教員研修編』金子書房 pp.184-193
- 藤原寿幸・井芹まい 2018 小学校低学年児童の自律性支援を志向した教員の学級集団づくりの効果に関する検討—集団の発達に応じた学級目標の設定の視点から— 学級経営心理学研究, 7, 31-42.
- 古市貴弘・西山久子 2015 好ましい行動を引き出す指導 (PBIS) 導入期における学級環境づくりの探索的検討 福岡教育大学紀要 第64号 第6分冊 pp.1-8
- 八並光俊・國分康孝 2008 新生徒指導ガイド—開発・予防・解決的な教育モデルによる発達援助—図書文化
- 伊澤直美 2016 自主的によりよい生活をつくる子供の育成を目指した学級活動(2)の試み—指導内容の重点化とクラス会議を活用した振り返り活動を通して— 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報 第6号 pp.111-118
- 河村茂雄 1999 Questionnaire-Utilities (Q-U) 小学校版 図書文化社
- 河村茂雄 2011 生徒指導・進路指導の理論と実際 図書文化
- 文部科学省 2010 生徒指導提要
- 文部科学省 2017 学習指導要領
- 関戸英紀・田中基 2010 通常学級に在籍する問題行動を示す児童に対する PBS (積極的行動支援) に基づいた

-
- 支援—クラスワイドな支援から個別支援へ— 特殊教育学研究, 48 (2), 135-146
- 田中博之 2013 学級力向上プロジェクト「こんなクラスにしたい!」を子どもが実現する方法 金子書房
- 田中博之 2014 学級力向上プロジェクト2実践事例集 小・中・高校編 金子書房
- 山崎茜・栗原慎二 2010 クラス会議が問題解決能力に及ぼす効果—HKISでの実践を例として— 学校教育実践学研究, 16, 37-44